



令和七年度

日南市読書感想文・読書感想画

コンクール受賞作品集

第十七集

主催 日南市教育委員会
協賛 株式会社ニチワ



はじめに

第十七回日南市読書感想文・読書感想画コンクールに応募してくれた児童・生徒のみなさん、本当にありがとうございます。

コンクールには、各学校から多くの作品の応募がありました。この度、教育長として、読書感想文と感想画コンクール、両方の作品を拝見させていただき、皆さんの真剣な取り組みと素晴らしい才能に心から感動いたしました。

読書も絵を描くことも、感性を磨き、心を豊かにする素晴らしい活動です。皆さんが今回の経験を通じて得た学びや喜びを大切にし、これからも様々なことに挑戦し、自分自身の可能性を広げていくことを心から応援しています。皆さんの未来が、豊かな学びと創造性に満ちたものとなることを願っています。

終わりに、本コンクールを実施するにあたり、御協賛いただきました株式会社ニチワ様をはじめ、指導や審査に際して多大な御尽力をいただきました学校関係者の皆様に対しまして、心からお礼申し上げます。

令和八年二月

日南市教育長 都 甲 政 文

読書感想文コンクール目次

【小学校一年生の部】

銀賞 『おばけのアッチとドラキュラスープ』を

よんで

榎原小学校

岩倉 いわくら

禾歩 かほ ・ 8

銅賞

チヨコレートつてすてき

吾田小学校

松下 まつした

嵩弥 たかや ・ 10

【小学校二年生の部】

銀賞

やさしいリリーのように

吾田小学校

阿萬 あまん

祈来 きこ ・ 11

【小学校三年生の部】

金賞

科学っておもしろい

飢肥小学校

濱屋 はまや

佑弦 ゆうげん ・ 13

銀賞

『たった2℃で』を読んで

榎原小学校

河野 かわの

芽樹 いぶき ・ 15

銅賞

失ばいしても大じょうぶ

細田小学校

酒井 さかい

姫那乃 ひなの ・ 17

入選

『たった2℃で』を読んで

潟上小学校

井戸川 いどがわ

恭尚 やすたか ・ 18

入選

たった2℃上がるだけで

潟上小学校

竹田 たけだ

結冬 ゆいと ・ 20

【小学校四年生の部】

金賞

みんなで地球を助けましょう

大堂津小学校

落合 おちあい

希光 のぞみ ・ 22

銀賞

学校が消えるその前に

北郷小学校

谷元 たにもと

彩咲 さら ・ 25

銅賞

『たった2℃で』を読んで

潟上小中校

小坂 こさか

璃海 りあ ・ 26

入選 『たった2℃で』を読んで

潟上小学校 松山 珠結莉・ 28

入選 音楽室でねずみが大あばれ

細田小学校 稲元 愛美華・ 29

【小学校五年生の部】

金賞 カラスとのきずな

北郷小学校 甲田 優心・ 31

銀賞 すべての命を大切に

飢肥小学校 坂元 伶名・ 33

入選 『ゆきだるまのあたま』を読んで

吾田小学校 大久保 涼翔・ 35

【小学校六年生の部】

銅賞 私がもらった勇氣

東郷小学校 松浦 笑溜・ 38

【中学校の部】

金賞 『明日、君が死ぬことを

僕だけが知っていた』

吾田中学校 三年 中津留 颯介・ 41

銀賞 目指せ県大会!!

細田中学校 二年 岸本 空恋・ 44

銅賞 音が消えてゆく世界

榎原中学校 三年 河野 茉友・ 47

入選 『下町サイキック』を読んで

東郷中学校 三年 池田 柚希・ 50

入選 個性ある自分

榎原中学校 二年 山本 琉央・ 54

読書感想文の審査を終えて・・・・・・ 57

読書感想画コンクール目次

【小学校一年生の部】・・・ 60・61

金賞 ネズネズのおえかき

やまね ともき

油津小学校 山根 智稀

銀賞 かいじゅうのすむしま

たなか そうし

油津小学校 田中 想士

銅賞 おどつてるこまつてる

おおしま な か

酒谷小学校 大嶋 声の花

入選 かめれおんせん

えびはら ひろと

吾田東小学校 蛸原 啓斗

入選 ごきげんななめのてんとうむし

さかい いちと

南郷小学校 酒井 壱虎

【小学校二年生の部】・・・ 62・63

金賞 かわいそうなぞう

ただち こたろう

桜ヶ丘小学校 忠地 虎太郎

銀賞 かいじゅうのすむしま

すずき ゆうしん

吾田東小学校 鈴木 結慎

銅賞 かいじゅうのすむしま

たけわき あおい

油津小学校 竹脇 葵風

入選 おまえうまそうだな

ほった れお

吾田小学校 發田 怜央

入選 いっすんぼうし

みずの ことほ

南郷小学校 水野 琴葉

【小学校三年生の部】・・・ 64・65

金賞 たんたのたんけん

たにぐち ゆり

潟上小学校 谷口 結理

銀賞 火の鳥

桜ヶ丘小学校 島田 潤奈
しまだ じゅんな

銅賞 雪窓

東郷小学校 中村 昶太郎
なかむら こうたろう

入選 かぶとむしとくわがたむしのひみつ

吾田小学校 河野 新
かわの あらた

入選 みんな、空をとべる

北郷小学校 河野 萌音
かわの もね

【小学校四年生の部】・・・66・67

金賞 小学館の図鑑NEO 魚

南郷小学校 上原 叶聖
うえはら とうま

銀賞 馬子と山んばあ

東郷小学校 竹中 風結
たけなか ふゆ

銅賞 ぼくのがっこう

大堂津小学校 岡澤 芽生
おかざわ めい

入選 銀河鉄道の夜

桜ヶ丘小学校 井上 大護
いのうえ だいご

入選 うまれてきてくれてありがとう

吾田小学校 荒武 唯月
あらたけ ゆづき

【小学校五年生の部】・・・68・69

金賞 わたしの名前はオクトーバー

南郷小学校 城戸 妃羽
きど ひわ

銀賞 白いりゆう黒いりゆう

桜ヶ丘小学校 長友 翼
ながとも つばさ

銅賞 羽毛恐竜 恐竜から鳥への進化

吾田東小学校 矢上 空
やがみ そら

入選 ねむれないおうさま

北郷小学校 川畑 ひかり
かわばた

入選 三分間ミステリー悪魔のささやき

飢肥小学校 小野 琴音
おの ことね

【小学校六年生の部】・・・・・・・・・・70・71

金賞 ぼくのころがうたいだす！

ばんどう もあ
吾田小学校 板東 桃愛

銀賞 マッチ売りの少女

はまだ いちか
飫肥小学校 濱田 一華

銅賞 かなたのif

うおみ いちか
油津小学校 魚見 市香

入選 わたしのあくびなかった？

すぎた はるま
大窪小学校 杉田 悠馬

入選 じいちゃんの山小屋

もり しずく
細田小学校 森 雫月

読書感想画の審査を終えて・・・・・・・・・・72

審査員氏名一覧・・・・・・・・・・74

讀書感想文入賞作品

【小学校一年生の部】

《講評》

本をよんですきになったところやおもしろくおもったところを、どうしてそう感じたかをわかるようにしっかりとかいています。

チヨコレートやさんやアイスクリームやさんにきょうみをもったことで、じぶんのゆめもたのしくあらわしていました。それに、出てくるとうじょうじんぶつのこととをすごい、まねしてみたいとかいたことがすばらしいですね。

これからも、おもしろそうだとおもう本を、たくさん見つけてほしいです。

銀賞

『おばけのアッチとドラキュラスープ』をよんで

榎原小学校 一年 岩倉 禾歩

わたしは、『おばけのアッチとドラキュラスープ』というおはなしをよみました。どうしてこのおはなしをえらんだかというと、まえよんだときにもおもしろかったからです。

このほんのちゅうしんじんぶつは、アッチとドララちゃんです。アッチはおばけで、ドララちゃんは、ドラキユラのまごむすめです。

アッチは、レストランヒバリのコックさんです。わた

しが、いちばんすきだったのは、アッチがちょっとかわったメニューをつくることです。メニューのなまえが、おもしろかったからです。たとえば、「すべりだいフルーツパフェ」です。おもちゃみたいでおもしろいなおもいました。

わたしのゆめは、アイスクリームやさんになることなので、まねしたいとおもいました。

ドラちゃんもかくれてりょうりをしていたので、ドラキュラのスープのつくりかたがわかりました。ちのスープのようなトマトをつかったスープでした。このつくりかたは、みんなにはないですよ。ほんをよんだひとだけがわかります。わたしのかあちゃんは、しつています。とうちゃんにもよんでもらいたいです。

よんだほん

「おばけのアッチとドラキュラスープ」

銅賞

チョコレートってすてき

吾田小学校 一年 松下 嵩弥

ぼくがよんだほんは、『ぎょうれつのできるチョコレートやさん』です。やさしいえでおもしろそうだからえらびました。

ふわふわしっぽのキタリスくん和上海リスくんは、なかよしのおともだちです。キタリスくんは、はずかしがりやです。シマリスくんは、いたずらっこです。もりでおにいさんのくるみをひろうおてつだいをして、チョコレートもらいました。おいしいとよろこびました。リスくんたちは「ぼく、チョコレートやさんになりたいで

す!」といいました。おにいさんが「きつとなれるよ」といいました。まいにちおにいさんのおみせがあるまちにかよいました。もりのみんながよろこんでくれるチョコレートをがんばってつくりました。もりにちいさなチョコレートやさんができました。もりのみんながきて、チョコレートをたべてよろこびました。

ぼくは、チョコレートをもりのみんなにあげているところが好きです。みんながえがおになるからです。このほんをよんで、リスさんたちがチョコレートやさんをつくったから、すごいとおもいました。

よんだほん

「ぎょうれつのできるチョコレートやさん」

【小学校二年生の部】

《講評》

本を読んだことで、友だちともつとなかよくなりたい、だれにでもやさしくしたいと坎んじることができたことは、とてもすばらしいことだ坎思います。

そうした気持ちになった坎こた坎のことを、やさしい気持ちになりながら読んで坎ったことが坎った坎って坎ます。友だちと出坎う坎切さやじぶんの中に生坎れたやさしさが、てい坎いに書き坎らわされて坎ました。

本から坎んじた力は、じぶんの坎も坎きくして坎れる坎ですね。

銀賞

やさしいリリーの坎ように

吾田小学校 二年 阿萬 祈来

白くてつやつやなリリーが坎わいくて、おもしろそうだとワクワクしながら、『しろい坎こリリー』を坎みま坎た。

もし、わたしが坎こを坎ったとしても、坎っぱいあそ坎でもつと坎つとなかよくな坎て、坎しい思坎出を坎くさん作坎て坎きたい坎坎思坎ました。

たけださん坎のリリーは、坎れい坎きでとてもつやつやしているのが自坎んで坎た。坎ぱさん、坎まさんには、坎日の元坎を出させ、お坎に坎りのともき坎んとは、坎

つといっしょにしているとやくそくをしていました。

みんなのあいをひとりじめするため、ともきくんの女
友だちも手入れしていない子ねこを家に入れることも、
全力でいやがっていました。

目つきのわるい黒ぶちのねこが通ると目をそむけて、
かわろうとしませんでした。

そんなある日、まいごになったリリーは、よわった黒
ねこ子ねこたちをたすけようとする黒ぶちに出会
いました。

いつもは、目つきがわるいいやなねこだと思っていた
黒ぶちが、めんどくさい見のいいやさしいねこだということ
を知りました。

それに、子ねこをなめてあげた時、その子はすごくう

れしそうな顔をしてよろこんでくれました。自分も子ね
この時に、なめてもらったことを思い出して、やさしい
気持ちになっていきました。

心も広くなったリリーは、新しいねこのお世をし、
黒ぶちにもあいさつするようになりました。

わたしも、見た目で人のことをきめつけず、友だちの
いいところを見つけて、今よりも、もっとなかよくなり
たいです。

そして、だれにでもやさしい、みんなにたよられる人
になりたいです。

読んだ本「しろいねこリリー」

【小学校三年生の部】

《講評》

科学や言葉にかかわることにきょうみをもち、テーマをうけとめながら読んだことで、自分で感じたり考えたりしたことを、分かりやすく書いています。

「どうして?」「ここがおもしろい!」と感ずること
は、読んでいる人によってちがいます。だから、感ず方
も考え方もたくさん出てくるものです。その楽しさや面
白さをたくさん感ず取ってくれたことがしつかりと伝
わってきました。

これからもいろんな本から、いろんなことを学んでい
ってほしいです。

金賞

科学っておもしろい

飢肥小学校 三年 濱屋 佑弦

ぼくは、一年生のときに、『なぜ? どうして? 一年生』
という本にであいました。家にこの本があつて、読んで
みると今まで知らなかったことを知ることができて、
「この本おもしろい!」と思いました。

読んだ後に、シリーズ二年生、三年生があることを知
り、三年になってこの本を読むことを楽しみにしていた
ので読んでみました。

まず、一番おもしろかったのは、風船が地上から八千
メートルまでとんでいくことができるということです。

口でふくらませた風船は、とぶことができません。でも、空を飛んでいく風船があるのは、どうしてかとふしぎに思いました。このシリーズの一年生の本に書いてあることを思い出しました。そこにはヘリウムガスという気体が、空気よりかるくて、ヘリウムを風船に入れると風船がうくことが書いてありました。ヘリウムガスを入れた風船をとばしてみたいと思いました。

次に、おもしろいと思ったのは、電気を作るのには、いろいろな方ほうがあるということです。火力発電、太陽光発電、原子力発電、風力発電、水力発電、地ねつ発電の六つの方ほうが書かれていました。この中で一番きょう味を持ったのは、太陽光発電です。本当に太陽から電気が作れるのかふしぎに思いました。町の中を

気をつけていると、太陽光発電のパネルを見つけることができました。本当に発電しているのか、たしかめることができないので、実験してみたいと思いました。さいごに、人間は火星にすむことができるかというところにきょう味を持ちました。火星と地きゅうはどちらがうのかふしぎに思いました。地きゅうはさんそとちつそがバランスよくつつまれている、火星はほとんどが二さんかたんそで、さんそがほとんどないことが分かりました。へいきん気おんは、地きゅうは十五どで火星はマイナス五十五どです。このことから、今は、火星にはすむことができないことが分かりました。今は、すめなくてもいつかはすんでみたいと思いました。

ぼくは、この本を読んで、科学のふしぎにますますき

よう味を持ちました。自分でも調べてみたいことができて、わくわくします。四年生になったら、このシリーズの四年生も読んでみたいです。そして、大人になったら、火星に行って、風船をとばしたり、太よう光発電の実けんをしたりしてみたいです。

読んだ本「たのしい！科学のふしぎ

なぜ？どうして？三年生」

銀賞

『たった2℃で』を読んで

榎原小学校 三年 河野 芽樹

ぼくがこの本を読んで強くおもったことは、たった2℃で死んでしまう生き物がいるから地球の気温をもう少し下げた方がいいということです。

また、あつさでウミガメが少なくなっているということにびっくりしました。あつさでウミガメはオスしかうまれなくなります。たまごを持ったメスがどんどん死んでしまいます。たまごがうめないからどんどん少なくなつて、見られなくなることがあるかもしれないということです。

そして、一番心にのこったことは、雨がふえたことで
オラウータンのえさが少なくなり、オラウータンがうえ
ている、ということです。あつさや雨のせいでオラウー
タンがうえているとは知りませんでした。

ぼくはあつかったらすぐクーラーやせん風きですず
しくなるけど、あつい地いきにいる動物や虫は、人のよ
うにあつさをしのげないと思います。

もし自分が虫や動物だったら、あつくて秋まで命がも
たないと思います。

次からは動物や虫のことを考えて、地球の温度が上
がる行動をできるだけ、ひかえていきたいです。

たとえばゴミの分別をすることです。そうすることで
もえるゴミが減って、もやす時間がみじかくなります。

また、リサイクルをすることが大切だと思います。
あつさでぜつめつきぐしゅになっている動物をたす
けるために、今考えたことを自分からすすんでしたいで
す。

そして動物たちも住みやすいかんきょうにしたいで
す。

読んだ本「たった2℃で・・・」

銅賞

失ばいしても大じょうぶ

細田小学校 三年 酒井 姫那乃

「もう買わん。ほんまに買わん。」この言葉は、大さかべんです。わたしは、この本を読んだ時とってもおもしろいと思いました。読む時の声をかえたら、もっとおもしろいと思いました。おもしろくて、何でも本を読みましました。

この本の好きな所は、何かいも、同じことをくりかえしているところです。同じことというのは、市場でとても大きな、食べものを見つけて、買ってしまおうということです。でも、食べようとする大きな食べ物、大あ

ばれしてみんなをふきとばしてしまいます。三回しつばいしたけどまたやさんは、また大きな食べ物を買ってしまいました。きつと、またやさんは何回も買ってしつばいしたけど食べたい気持ちが強かったのだと思います。さらに、たくさんの友だちによろこんでもらうために、買ってきているのだと思います。またやさんは、みんなをおなかいっぱいにさせてあげたいと、考えていると思います。またやさんは、いい人です。

わたしもまたやさんみたいに、とてもやさしくしたいと思っています。

しかし、みんなを楽しませようとしておもちゃを出すぎて、あつという間にきたなくなってしまう。大失ばいでおこられてしまいます。しかも、一回だけでな

く何回もくり返してしまいました。自分も失ばいをくりかえしているじゃないか、と思いました。でも先生が、「でもみんながよろこんでくれるなら、オッケー。」と言ってくれました。でも、失ばいは、へらしたいなと思いました。

このおも白い本をみんなに、読みきかせしました。わたしが読むと、

「ひなのさん、大さかべん上手。」

とほめてくれました。わたしは、またおも白い本をかりて、読みきかせをしたいです。大さかべんではなく、いろいろな言葉を知りたいです。

読んだ本「とてもおおきなサンマのひらき」

入選

『たった2℃で』を読んで

潟上小学校 三年 井戸川 恭尚

この本と出会ったきっかけは、先生が読み聞かせをしてくれたからです。

ぼくは、『たった2℃で』という題名から暑さや寒さのお話なのかなと思いました。ぼくは、地きゅうおんだんかという言葉をはじめて聞きました。

『たった2℃』には、魚やウミガメ、ジャイアントパンダなどの生物が出てきました。

ぼくは、この本に出てきたジャイアントパンダのことが、とくにおどろきました。

地きゅうのおんどがたった2℃上がると、ジャイアントパンダのくらすところの、タケとサケがよくそだたなくなり、ジャイアントパンダの食べる物は、早いうちにへってしまうそうです。これを知って、かわいそうだなと思いました。パンダの食べものがなくなるからです。もし、食べ物がなくなったら、パンダはしんでしまします。

読んだ本「たった2℃で・・・」

『たった2℃で』を読んで、生物たちがかわいそうな気持ちになりました。今までのぼくは、せんぷうきをけしわすれることと、電気をけしわすれることがありました。つけっぱなしにすると、地きゅうおんだんかにつながることをしました。だから、これからは、せんぷうきをつけたときは、そこをはなれるときにならずけし

て出ることをいしきしていききたいです。また、へやを出ていくときは、電気をけすボタンをおすことをくせづけてすごしたいです。そして、すこしでも地きゅうおんだんかを止めたいです。

入 選

たった2℃上がるだけで

潟上小学校 三年 竹田 結冬

この本と出会った、きっかけは、先生が読み聞かせをしてくれたからです。

『たった2℃で』という題名から2℃で、何がどういうふうにへんかするのかなと思いました。ぼくは、地球温暖化という言葉をはじめて聞きました。

『たった2℃で』には、魚や、ウミガメや、虫や、サングショウなどの生き物たちが出てきました。

ぼくは、この本に出てきたジャイアントパンダのことが、とくにおどろきました。

地球の温度がたった2℃上がると、ジャイアントパンダは、食べ物のタケとサケがよくそだたなくなっておなかをすかしてしまうそうです。これを知って、たった2℃上がるだけでジャイアントパンダの食べ物がなくなってしまうなんてひどいなあと思いました。

『たった2℃で』を読んで生き物たちがかわいそうという気持ちになりました。

今までのぼくが気にせずしてしまったのは、のこしたごはんをすててしまっていたことです。ごはんをすてると、ごみがふえて、たくさんのごみをもやすことで地きゅうおんだんかにつながります。

これからごはんをしっかりと食べていきたいと思います。にがてな食べ物は少しずつでも食べられるようにし

て、食品ロスをへらして地きゅうおんだん化を止めたい
です。

読んだ本「たった2℃で・・・」

【小学校四年生の部】

金賞

みんなで地球を助けましょう

《講評》

大堂津小学校 四年 落合 希光

本を読もうと思ったきっかけや理由が素直に表現されていました。

また、本を読んで初めて知り得た時のおどろきや心を動かされたことを自分の体験と照らし合わせて、自分の感想として述べてあることに感心しました。

最期に、本を読んで学んだことを、これからの自分の生活にどう生かすか考えており、すばらしいと思いました。これからも心に残るたくさん本の本と出会えるといいです。

私の平熱は三十六度台です。病気でたった二度上がり、三十八度以上の体温になると、食欲がなくなり身体もだるく、ねこんでしまいます。

この本の表紙は背景が赤く、氷が溶けだし白クマやぞうなどの様々な動物の表情が苦しそうに見えました。『たった2℃で…』という題から、どのようなことが起きているのだろうと気になり、読んでみようと思いました。

この本には、水温や気温が二度上がると、海の中やり

くに住んでいる生き物が不幸になっていくことが具体的に紹介してありました。たった二度の変化で、地球でくらす生き物の命があぶなくなることがわかり不安になりました。

私が特に印しようにのこった場面は、サンゴが真っ白になり死んでしまうところです。今まで水族館やテレビで、サンゴしよのまわりを、クマノミやチョウチョウウオなどの海水魚が泳いでいるところを見ました。魚は色鮮やかでかわいく、サンゴの様々な形が面白く、好きです。ところが、海水の温度が二度上がっただけで、サンゴは全部白くなり死んでしまい、魚もいなくなり、命があふれていた海は死の海になってしまいました。このようなことを初めて知り、びっくりし、悲しくなりま

した。

私はこの本を読み、作者の伝えたいことは、二つあるのではないかと感じました。一つ目は、地球温暖化によっておきているいじょうな気候が、多くの生き物の命をあぶなくしていることです。二つ目は、これ以上、地球が病気になるまいよう、熱が出ないように、私たちは地球の手当てをし、助けなければならないということです。

人間のように、病気になった時に薬を飲んで元気になることはできません。では実さいに、地球温暖化が進まないよう、私にできることを考えました。しかし、私にはむずかしい課題だったので、インターネットを使い調べました。調べてみると多くの取り組みがしうかい

て考えてほしいです。

読んだ本「たった2℃で・・・」

されていましたが、その中から私にでもすぐに実せんできるところを三つ決めました。一つ目はせつ電です。例えば、電気をつけっぱなしにせず、使わない時はこまめに消したり、エアコンの設定温度を低くしたりしないことです。二つ目は、水を大切に使うことです。例えば、シャワーを出す時間を短くしたり、お風呂ののこりの湯をせんたくに使ったりすることです。三つ目は、ごみをへらすこととリサイクルです。例えば、ごみの分別をしたり、お下がりのできる物は友達にゆずったりすることです。このようなことに毎日取り組み、地球を元気にすることができればよいと考えます。

この本は、地球温だん化について知りたい人におすすめです。しかしみんなに読んでもらい、環境問題につい

銀賞

学校が消えるその前に

北郷小学校 四年 谷元 彩咲

わたしは、『小学校がなくなる』という本を読みました。

この本を選んだのは、市立図書館の四年生向けのコーナーでおすすめされていたからです。タイトルを見て、「えっ、学校がなくなるってどういうこと？」とおどろいて、気になったので読んでみました。

このお話は、都小学校という小さな学校がなくなってしまいかもしれないと知った九人の子どもたちが、学校を守るためにはどうしたらいいかを一生けんめい考え、

いろいろな行動をしていくお話です。

わたしが一番心に残ったのは、子どもたちがしよ名を集める運動を始めたところです。はがきを作ったり、学校が大切だという気持ちを人に伝えたり、みんなで力を合わせてがんばったりすると心に心を打たれました。また、そんな子どもたちに、

「がんばってね。」

と声をかけてくれる人やおうえんしてくれる人がたくさんあらわれて、とてもあたたかい気持ちになりました。

この本を読んで分かったことは、都小学校のことを大切に思っている人がたくさんいる、ということです。通っている子どもたちも、まわりの大人たちも、学校がなくなるのをさびしく思っているんだなと感じました。ま

た、子どもたちが「学校をなくしたくない」という気持ちを形にするために、ちゃんと話し合って、自分たちができることを考えて、一つずつ行動していったところがすごいと思いました。ただ口で「いやだ」と言うだけじゃなくて、行動にうつすことの大切さもわかりました。

わたしは、学校があることはあたりまえのことだと思っていました。でも、今ある学校がずっと続くとはかぎらないんだということに気づきました。わたしの通っている学校にもたくさんのおい出がつまっています、友達と過ごす時間がとても大切だな、とあらためて思いました。これからは、学校で過ごす時間をもっと大切にして、友達と楽しい思い出をたくさん作っていききたいです。

読んだ本「小学校がなくなる！」

銅賞

『たった2℃で』を読んで

潟上小学校 四年 小坂 璃海

この本と出会ったきっかけは、先生が読み聞かせをしてくれたからです。

『たった2℃で』という題名から2℃温度が上がったり、下がったりする本なのかなと思いました。わたしは、地球温暖化という言葉を知っていました。

『たった2℃で』には、魚やサンゴ、ゴマフアザラシ、ウミガメ、ジャイアントパンダ、虫、人などが出てきました。

わたしは、この本に出てきたゴマフアザラシのことが、

とくにかわいそうでした。

地球の温度がたった2℃上がると、ゴマファザラシは、赤ちゃんをうみそだてるがんじょうな流水ができなくなり、うすい流水をわって入ってきたシャチから、赤ちゃんと親のアザラシが食べられてしまうそうです。

これを知って、温度がたった2℃上がっただけに、ゴマファザラシの赤ちゃんが、シャチに食べられるから、わたしは、かわいそうだなあと思いました。だから、わたしは、シャチに、ゴマファザラシが食べられないように地球温だん化をへらしたいなあと思いました。

『たった2℃で』を読んで、たった2℃しか温度は上がっていないのに、こんなに生き物たちにえいきょうをあたえているのだなあと思いました。わたしは、生き物

たちの気持ちも大事にしていきたいと思いました。

今までのわたしは、かんきょうのことを気にかけず、夏はずっとエアコンをつけっぱなしにしたり、水もむだ使いをしていたりしたので、これからは、生き物たちのこともみんなのことも考えて、気をつけていきたいです。そして、地球温だん化もふせぎたいと思いました。

読んだ本「たった2℃で・・・」

入 選

『たった2℃で』を読んで

鴻上小学校 四年 松山 珠結莉

この本と出会ったきっかけは、先生が読み聞かせをしてくれたからです。

『たった2℃で』という題名からちよつとした温度で大変なことが起きるのかなと、想ぞうしました。わたしは、地球温だん化という言葉を知っていました。

『たった2℃で』には、虫や魚やゴマフアザラシなどが出てきました。

わたしは、この本に出てきた虫のことがおどろきしました。

地球の温度がたった2℃上がると、虫は、ばく発的に

ふえて、野さいや米などはもちろん、かんきょうに大きなこんらんをもたらしてしまうそうです。

これを知って、ちよつとこわい気持ちになりました。もし、たくさんのお虫がふえてしまったらきげんな虫が人をおそってしまうかもしれないからです。

『たった2℃で』を読んで地球温だん化になると、虫はふえるけど魚や動物は少なくなってしまうかわいそうだと思います。

今までのわたしは、電気をつけっぱなしにしていたり、使えなくなった折り紙をすぐすててしまったりしていました。そうすると、地球温だん化につながることを知りました。

だから、これからは、電気を使わないときはこまめに

消します。また、使えなくなった紙は、図工の工作などで再利用したいです。そして、地球温だん化をこれ以上進めないようにしたいです。

入選

音楽室でねずみが大あばれ

細田小学校 四年 稲元 愛美華

読んだ本「たった2℃で・・・」

わたしは『歌うねずみウルフ』という本を読みました。この本を選んだのは、この本が面白そうだと思ったからです。

この本は、歌うねずみウルフが主人公の物語です。歌うねずみウルフはやさしい人です。そして、歌うねずみウルフは、音楽が好きで歌の体験をします。

わたしが好きなのは、ピアノの上でスケートをしているところです。どんな音ができるのか分からなかったので先生が、

「今度ピアノでやってみましょうか。」

と言ってくれました。わたしは、

「どんな音が楽しみです。」

と言いました。

音楽でまず白けんをすべる、をやりました。キュキュ

ーとねずみがうれしい気持ちですべてにいるみたいなの音がしました。木きんや鉄きんでも低い所から高い所へ一気に走るというのをためしました。木きんは森の中で

遊んでいるみたいでした。大きさによってなる音が変わりました。鉄きんはどんどん高い音から大きい音になりました。ガラスみたいな音できれいでした。木きん、鉄きん、ピアノ、オルガン、全部をあわせました。クラスみんなでひいたらきれいな音でした。みんなあわさって

いい音でそれぞれの音がかぶさっていい音でした。友達とおいかけっこをしているみたいで面白かったです。みんなの音があわさってきれいと思ったり、聞いてこんなにきれいなんだと思いました。ためしてみても、うれしい気持ちになりました。

この本は市立図書館で借りました。おすすめの本にあつてねずみが歌うから面白そうだなあと思ったから選びました。次のたいよう号がくるのも楽しみです。

読んだ本「歌うねずみウルフ」

【小学校五年生の部】

《講評》

なぜその本を読もうと思ったのか、本との出会いや読もうと思ったきっかけがしっかりと書かれていました。読み進める中で、自分の経験や実生活と比べながら五年生なりに、深く考えているところに感心しました。

終りの方では、学んだことや感動したことをこれからの生活にどのように生かしていきたいかという思い、また将来の夢に関連付けた思いがしっかりと書かれており、どれも素晴らしい感想文でした。

これからも様々なジャンルの本と出会い、心に栄養をたくさんつけてほしいと思います。

金賞

カラスとのきずな

北郷小学校 五年 甲田 優心

『森に帰らなかったカラス』に出てくるニシコクマルガラスは、弱ったひなのすがたで主人公とその友達に公園で拾われました。動物好きの主人公が、ニシコクマルガラスのひなを家に持って帰り、周りの人達に支えられながら育てる話です。なぜ、カラスは森に帰らなかったのか気になったから読んでみることにしました。

カラスはたいてい森にいます。木の上にとまって、「カーカー。」

と鳴いています。そしてお腹がすくと人間の世界におり

て来て、ゴミをあさります。人間にとってイメージの悪いカラス。それなのにこの本の主人公は、ニシコクマルガラスのひなを持って帰って育てようと思いました。私はそこで、はつとしました。カラスを飼うなんて信じられないと思ったからです。人間がカラスを育てられるのかなと思いました。主人公の家族はパブを営んでいて、この常連客や主人公の友達からもカラスはかわいがられていました。かわいがられそうにもないカラスが、周りの人達にかわいがられていたのは主人公がカラスを一生けん命育てているすがたが伝わったからだと思います。カラスが大きく育って成長するとうれしいと思うし、エサを食べてくれることもうれしいと思います。うれしい事を周りの人達と楽しむことで、よりうれしくな

ると思います。でもカラスを育てるには楽しい事ばかりではありませんでした。カラスがとつ然いなくなるという事件がおきました。私は目の前が暗くなり、ぞつとしました。なぜなら、私もペットを飼っていて、同じ場面を考えてしまったからです。主人公もぞつとしたと思います。必死に探して見つかった時には、ほつとしたと思います。はなれたくないという気持ちが伝わりました。私のお父さんとお母さんは、にわとりを育てる仕事をしています。毎日エサをあげたり、病気にならないように注射をしてあげたり、育てる大変さがとても分かります。そして、にわとりとお別れをする時がきます。涙が出ます。主人公がカラスを想う気持ちと、私がにわとりを想う気持ちは同じだなと思いました。

生き物を飼うという事は出会いも別れもきます。カラスは元あるべき森に帰った方が幸せなのではないかな

と思ったけど、主人公とカラスは、はなれられないきずながありました。ペットだけど家族の一員のように育てられて、言葉がなくても心を通い合わせてコミュニケーションをとっているように感じたからです。

これまでのカラスは、ゴミ袋の中をあさって食べ物を探したり、農作物を食べたりいやなイメージだったけど、カラスに対する見方が変わりました。主人公のように温かい目でカラスを見守りたいです。

読んだ本「森に帰らなかったカラス」

銀賞

すべての命を大切に

飢肥小学校 五年 坂元 伶名

みなさんは、自然や動物たちを大切にできていますか？

この本は、題名のとおり、動物と話せる少女リリアーネが、動物たちとさまざまな事件を解決する冒険物語のシリーズです。私が読んだお話は、リリアーネが誘拐されて、オオカミのアスカンに助けてもらおうというお話です。

この本を読んで、一番感動したところは、アスカンがりょうしにつかまりそうになったときに、リリアーネが

りようしに立ちむかつて、

「危険ではありません！このオオカミはちがいます！」

と言って、アスカンを助けたところです。

私もこの本を読む前は、この本に出てくるりようしや、森林管理局の人たちと同じように、オオカミは危険な動物だと思っていました。なぜなら、オオカミは肉食動物

だからです。私の中では、肉食動物は危険だというイメージ

ージがとても大きいです。でも、この本を読んで、オオ

カミに対しての考え方が少し変わりました。もしかした

ら、オオカミではなく、森林をあらしたりする、人間の

方が危険なのではないかと考えるようになりました。

なかむらともこ

この本の訳者、中村智子さんのあとがきに、「人間が

オオカミにおそわれた報告は今のところはない。本書の

中でも、リリアーネや動物たちがうったえていましたね。

危険なのは動物ではない、人間だ、と。人間が動物たち

の生活圏にふみこみすぎさえしなければ、ともに平和に

くらせるのかもしれませんがね。」と書かれてありました。

私もそう思います。

オオカミ以外の野生の動物も、危険だと勝手に決めつ

けられたり、都市開発のために、動物たちが住む森林を

こわされたりして、動物たちがかわいそうだと思います。

もちろん、自然界には危険な動物たちもいるというのは

知っています。でも、人間が森林をできるだけ残し、勝

手なきめつけをやめていけば、人間と動物たちは平和に

くらせるのかもしれないと私は思います。

私は、この本を読んで、野生の動物たちを守る取り組み

みに、私も少しでも協力できることはないかを調べてみたいなと思いました。

そして、動物や森林、花などの自然を大切にしていきたいなと思いました。

動物と自然、そして人にやさしくできる人になるために、少しでも自分にできることをさがして、がんばっていききたいです。

読んだ本「動物と話せる少女リリアーネ

さすらいのオオカミ森に帰る！」

入選

『ゆきだるまのあたま』を読んで

吾田小学校 五年 大久保 涼翔

なぜ、ぼくがこの本を読もうと思ったかというと、一年生のころに読んだことがあってこの宮崎は、あまり雪がふらないので、雪の本を読みたいと思ったからです。

この本の最初は、男の子が雪だるまを作っていたけど、まだ頭を作っていませんでした。男の子が、「雪だるま君、後で頭を作ってあげるね。」

と言いました。ぼくは、男の子の表情から、うれしそうに、やさしく言っていたのが分かりました。

しかし、男の子は、いったん昼ごはんを食べに家に帰

りました。

次に、犬が出てきて、雪だるまが、

「早く頭がほしいなあ。」

と言ったので、犬が頭になってあげました。この犬は、とてもやさしい犬だなと思いました。

次に、石が来て、雪だるまの頭になってくれました。でも、石は、めりこんでしまい、だめで悲しそうでした。

ぼくは、石はやさしかったのに頭になれず、残念だなあと思いました。

次は、三角コーンが来てくれました。雪だるまの頭になってくれて、雪だるまは、気に入ってうれしそうでした。三角コーンは、工事中で、仕事中文のに來ていたのが、とてもおもしろかったです。

次は、パン屋の車がきました。そして、パンが車から

出てきて、

「ぼくならすてきな頭だよ。」

と言って、とび出してきました。雪だるまは、

「ちようどいい。」

と言いました。とてもうれしそうでした。

次に、小鳥が空から飛んできて、雪だるまの頭にいるパンをみんな食べてしまいました。ぼくは、小鳥のパンを食べるすがたが、とてもかわいいなあと思いました。

そして、やっと、男の子がやって来て、うれしように、

「雪だるま君、おはよう。」

と言って雪だるまの頭を作ってくれました。雪だるまが

完成し、雪だるまは、とてもうれしそうでした。犬も来て、いっしょに、喜んでうれしそうでした。

ぼくは、この本を読んで、とてもおもしろく、どんな雪だるまの頭が、変わっていったって、想像力がとても高まりました。ぼくが、特に、印象に残ったところは、小鳥が飛んできたところです。とてもかわいく、おなかがすいていたんだなあと思いました。

この本の登場人物は、みんなやさしくて、ぼくも、このようなやさしさをもって、生活していきたいです。

本は、集中力を高めたり、想像力をふくらませたりできるので、これからも、本にふれあって、もっと、自分の世界を広げていきたいと思っています。

読んだ本「ゆきだるまのあたま」

【小学校六年生の部】

《講評》

本を読むきっかけや、さまざまな場面で自分がどう感じたのか、何に共感したのかが丁寧に書かれていました。まるで本の中の登場人物の一人として物語を体験しているようで、読んでいて引き込まれました。また、自分のまわりにはいろいろな考え方があること、友だちに相談することの大切さ、そして一人ひとりの気持ちを大切にすることなど、多くの学びが伝わってきました。

一冊の本との出会いが、心に長く残ることもあります。これからも、そんな素敵な本との出会いを大切にしてくださいね。

銅賞

私がもらった勇氣

東郷小学校 六年 松浦 笑溜

私がこの本を選んだ理由は、なぜおこなわを跳びたかないのかが知りたくなりこの本を読むきっかけになりました。

この本の主人公の女の子は、生まれつき左足が弱く、運動が苦手でした。おこなわ大会にむけて、練習をしていんだけどクラスが勝てないと思い見学すると言ったところが物語のはじまりです。でもクラスのみんなから、たくさんの意見ができました。このおこなわ大会は、小学校で長くつづいていて、保護者も見にきていて、一番多く

跳べたクラスがゆう勝し、大きなトロフィーがもらえるのでみんな気合いが入っていました。

みんななどの思いとは別で、女の子の気持ちは、めいわくをかけたくない。でも自分も本当はやりたかった。足は悪かったけど、

「これをしてはいけない。」

と、お医者さんにとめられていることはない、できることは、みんなと同じように、なんでもやりたかった気持ち私が私の心に一番ひびきました。私も自分の気持ちに素直になれない時があるので分かります。

そして、クラスの学級会の話し合いの中で、

「多様性を大切にしよう。」

と言う案ができました。男だから女だから、障害があるか

らないからではない。差別してはいけないと話し合いの中でできました。そのことにより、女の子の気持ちに変化ができて、自分の役割を見つけることができました。それは、見学ではなく、女の子も目標を決めて跳ぶという事です。大会まで何度も練習をして、ひっかかった時や、つかれたときに伝える言葉も、

「頑張れ!!。」

ではなく

「ドンマイ。」「おしいよ。」

などの言葉で声をかけをしました。

私はこの場面を読んだ時このクラスの皆が好きになりました。私がこの本に出てくる人物だったらすごい勇氣をもらえて一人じゃない、つらい時は皆がそばにいて

くれる。と思えたからです。そしてこのクラスのすごい所は、学級会で話し合った、

「目標回数を跳べばいい方法。」

が他のクラスにも伝わり広がっていき、苦手な人もプレッシャーでつらくならずに参加でき、記録にも取り組めるという大会になった事です。優勝する事だけが大事ではなくて、一人一人の気持ちが大切にされていると感じました。

この本を読んで私が思った事は、一人で悩むのではなく色々な意見を聞いてみる事が大切だと思いました。クラスの中では、自分が思っていない気持ちを言う人もいたけれど、自分の考えがうまく伝えられないと思った時に、友達が助けてくれました。私は自分の気持ちを伝える

る事が苦手なのでこの本を読んで勇気をもらえました。

読んだ本「おおなわ跳びません」

【 中 学 校 の 部 】

金 賞

『明日、君が死ぬことを僕だけが知っていた』

吾田中学校 三年 中津留 颯介

『明日、君が死ぬことを僕だけが知っていた』を読み終えたとき、胸の奥に重いけれど温かい気持ちが広がりました。読む前はタイトルからも少し不思議で、少し怖いような気がしていましたが、実際に読み進めると、ただの「死」をめぐる話ではなかったのです。「大切な人を感じる気持ち」や「生きる意味」を深く考えさせられる物語でした。

主人公は、突然「明日、君が死ぬ」と分かってしまう

力を持ってしまう。最初はただの偶然のように見えても、その力が間違いではなかったときの恐ろしさは想像を超えていました。「もし自分が同じ力を持ってしまうらどうするのだろうか」と僕は考えました。きっと誰かを助けたいと思うでしょう。しかし、同時に「もしその力をもっていること事態が間違っていたら」とか「助けられなかったらどうしよう」と不安になるだろうと思います。その葛藤かっとうがこの物語には強く描かれていて、ページをめくる手が止まりませんでした。

特に心に残った部分は、主人公が「誰かの死を知ってしまったときに、自分に何ができるのか」という問いを必死に考える姿です。たとえ自分が傷ついても、大切な人を守りたいという気持ちは、とても人間らしく美しい

と共感することができました。私たちは普段、明日も当たり前のように生きていると思っています。でも、この物語は、「明日は必ず来るわけじゃない」という事実を突きつけてきます。私は胸にささりました。そして、だからこそ、今そばにいる人を大切にすること、一日一日を悔いなく過ごすことが大事なのだと気づかされたのです。

また、主人公とヒロインの関係もとても印象的でした。最初は普通のクラスメイトのように見えていました。「死」という大きな出来事を前にした時、お互いを支え合う姿はとても強く、そして切ないものでした。読みながら二人のことを自分に置きかえ、考えたことは、「もし自分に大切な友達や家族が明日いなくなるとしたら、

自分はどんな言葉を大切な人達にかけられるだろう」ということです。普段は照れくさくて言えない「ありがとう」という感謝の一言や「一緒にいて楽しい」という素直な気持ちを、ちゃんと伝えておくべきだと感じました。私自身、日々の学校生活や友達との時間を「当たり前」と思って過ごしています。しかし、この本を読んで「当たり前前はいつか突然なくなるかもしれない」という考えが起きるようになりました。それはとても怖いことです。でも逆に言えば「だからこそ今日を全力で生きよう」という前向きな気持ちにもなれます。人は必ず死ぬ存在ですが、その人生の中でどう生きるかが一番大切だと思うのです。

この本を読んで、私は自分の周りの「大切な人に対し

て後悔しないようにしたい」と強く思います。例えば家族に冷たい態度をとってしまったたり、友達にきつい言葉を言ってしまったりすることは誰にでもあります。でも、もしそれが最後になってしまったら、一生後悔すると思うのです。だからこそ「相手を思いやる気持ちを忘れないこと」が、自分にとっても相手にとっても「幸せにながる」のだと思います。

私は「死」というテーマを扱っているのに、不思議と暗い気持ちだけでは終わらなかった…。むしろ「生きることの尊さ」や「誰かを大切に思う気持ち」を前より強く感じられるようになったのです。

これからの日常の中で、この本から学んだことを小さなことから実践していきたいです。友達や家族に対して

感謝の気持ちを言葉にすること。悔いのないように毎日を大事にすること。それが私がこの本から受け取った一番大きなメッセージです。『明日、君が死ぬことを僕だけが知っていた』は、私にとってただの小説ではなく、「生き方」を考えるきっかけをくれた一冊になりました。

読んだ本「明日、君が死ぬことを

僕だけが知っていた」

銀賞

目指せ県大会!!

細田中学校 二年 岸本 空恋

夏の日差しが照りつける中、私はボールを追う。焼けた肌に、汗が流れ、息も上がるけれど、足を止めることはない。この夏の暑さの中でこそ、自分の限界に挑んでいる気がする。

私が『野球ノートに書いた甲子園』という本を読もうと思ったきっかけは、このタイトルが今の私と同じ状況で共感できるのではないかと思ったからだ。

この本には、全国の高校野球に取り組む十三人の球児たちが書いた、実際の野球ノートが紹介されている。そのノートには、技術面の反省や練習の記録だけではなく、

自分の弱さや葛藤、仲間との関係、そして夢への熱い思いがたくさんつまっていて、一人一人の本気の思いがストレートに伝わってきた。ページをめくるたびに、部活動に本気で取り組んでいる一人として、何度も心が熱くなった。

特に心に残ったのは、チームメイトとうまくいかずに悩んでいた球児のノートの一節だ。そこには、「勝たい、でも伝わらない、どうすればいいんだろう。」という言葉が書かれていた。その言葉を目にしたとき、まるで自分の気持ちちを代弁しているように感じた。

私は今、女子ソフトテニス部に所属し、日々の練習を励んでいる。私も何度も、「勝ちたい。」という強い気持ちちが空回りしてしまい、うまくいかないことがあった。

仲間に思いを伝えようとしても、うまくいかないばかりか、逆にギクシャクしてしまうこともあった。でも、この本に出てくる球児たちは、悩みながらも、自分と向き合って、あきらめずに前を向いて努力を続けていた。その姿に、自分ももっと頑張りたい、夢を追いかケたいという気持ちが強くなっていった。

私は、以前から「心のノート」と呼んでいるノートを書いている。そのノートには、部活でうまくいかなかったことや反省、仲間への思い、そして自分の気持ちを正直に書いている。最近よく書いているのは、「地区大会で優勝したい。」という目標についてだ。毎日のようにその思いを書いている。不安になるときもあるが、ノートに書くことで、自分の気持ちをぐまかさずに見つめる

ことができ、「もっと努力しよう。」「絶対あきらめたくない。」という気持ちがどんどん強くなっていく。「心のノート」は、今の私にとって大切な支えだ。書くことで、頭の中が整理されたり、落ち込んだときにも、自分を励ましてくれたりする。そして、数か月前に書いた自分の言葉を読み返して、「このときより成長できている。」と思えたとき、ノートが自分の歩みを記録してくれていることに気づくのだ。

この本を読んで改めて思ったのは、「言葉にして残すこと」は大切だということだ。気持ちを書き出すことで、自分の中のモヤモヤがはっきりと表現され、自分自身としっかり向き合うことができる。そして、その積み重ねが夢への一歩につながっていく。だからこそ、私はこれ

からも、「心のノート」に自分の気持ちを書き続けていきたいと思う。

地区大会優勝という目標は、まだ遠く感じることもある。でも、自分の思いをノートに書き続けることで、少しずつ目標に近づいていける気がする。何より、「勝ちたい。」「もっと強くなりたい。」という思いも、これからもち続けたいと思っている。

ノートはただの記録ではなく、自分の気持ちと目標をつなげてくれる大切な存在だ。毎日の中で感じたことや、目標への思いを自分の言葉で書き続けることで、自分を見つめ直すことができたり、自分の弱さと向き合うことができるのだと気づいた。

また、この本を読んでから、自分がこれまでやってき

た努力や練習は目標を達成させる一部にすぎないことに気づいた。“優勝する”という目標は、ただ願うだけでは、近づかないので、日々の練習の中での課題を改善していきたい。その積み重ねこそが、本当の強さにつながり、夢への実現につながるということを、学ぶことができた。

読んだ本

「野球ノートに書いた甲子園」

銅賞

音が消えてゆく世界

榎原中学校 三年 河野 茉友

私は、『残像に口紅を』という本を読みました。この本と出会ったきっかけは、SNSの動画内で紹介されていて、この本の題名の残像とは何だろうと気になったからです。

この本は、多く存在する音が少しずつ消えてゆく世界で執筆し、飲食し、生活していく小説家を描いた物語です。私は、この存在する音が消えてゆく、という点に衝撃を受けました。なぜなら、小説は文字で読み手に物語の世界を伝えているのに、作者はわざと音を消して伝えられる情報を少なくしているからです。しかし、読み進

めていくと思っていたよりも文章に違和感がなく、作者の語彙力に感嘆しました。ごいりよく かんたん

この本の中では、音が消えた影響で登場人物や、あらゆるものが元からなかったものとなる現象が起こります。それに対して、残された者達は、そこにあつたと分かるのに、そこにあつたものが分からないといった、モヤモヤする気持ちになり、読んでいる側もいつももどかしい気持ちになりました。しかし、物語の中の人達にとっては、名前を知っている人達が突然居なくなつて、存在すらも忘れ、虚しさしか残らない、最悪な現象だと思いました。もし、私が物語の中の人物だったら、大切な人を忘れることになるので、絶対に物語の中の人物になりたくないと思いました。

主人公である男には、妻と三人の娘が居ましたが、音

が消えてゆくにつれて一人一人消えていく最中、主人公
が消えた娘に対して、化粧した顔を見たかったと、脳裏
に浮かぶ残像に口紅を差していた描写がありました。私
はそこで読む前に気になっていた残像とは何かを知り、
残像とは、消えていった人達のことなのだと思います。
そして、残像はあつという間に目の前からなくなつてし
まうものなので、消えていった人や物は、誰にも知られ
ないまま、想い出に残らないまま消えてしまうと思うと、
寂しいものだと感じました。だからこそ、主人公が紅を
差したのは残像が少しでも長く存在できるようにする
ためでもあったのかな、と思いました。

私は、この本を読んで多くのことについて考えること

が出来ました。

一つ目は、人はいつも使っていた言葉がなくなると、
その人の個性がなくなってしまうことです。例えば、自
分自身をどう呼ぶか、語尾や、言葉の選び方にもその人
の個性が出ます。しかし、この本の中では使える文字が
決められているので、いつもとは違った話し方になり、
個性が無くなってしまいます。文章の中では、人間では
なく、まるで人間を装っている何かのようだと表現され
ていて、まさにその通りだと思います。

二つ目は、残り少なくなった音で、文章を作ると、一
つ一つの文の長さが短くなり、工夫をして作らないと意
味が通じなくなってしまうことです。物語の最後の方で
は少ない音で構成されているので読む時には、文を見て

想像することが多かったです。想像することが出来るということとは、文がしっかり作られている、ということなので、オノマトペや同音異義語などを使って文を工夫しながら書いている作者には目を見張るものがありました。

三つ目は、音が消えてゆく世界での対処法についてです。この本は最後には全ての音が消えてしまうので、それまでの世界で消失するものを減らすにはどうすれば良いか考えた結果、新しい呼び方を考えることができると思いました。最近では、若い人達を中心に略語が生まれ出されているため、もし私が物語の中の登場人物になっても、新しい名前や略語をたくさんつけたら、音が消えたときの被害が少なくて済むのではないかと思いました

た。

また、主人公に名前を知らなければ生き残れると思いました。その理由として、文中に出てきた名前が出なかった男は、名前が無いため、消すことが難しいからです。しかし、私は、物語の主要人物になりたいので、この策は、私だったらあまり使わないと思いました。

この本の最後は、前の方のページのようにびっしり文字がなく、空白が目立つようになり、本当に本の中の世界が消えかかっているようでした。一番最後には、「ん」を引けば世界には何も残らない、と書かれていて、その後の空白が世界の終わりを告げているようで、読み終わると満足感と共に虚しさを感じました。もし、もう一度読むことがあったら、消えた音について注目しながら読

みたいです。

読んだ本「残像に口紅を」

入選

『下町サイキック』を読んで

東郷中学校 三年 池田 柚希

この本は吉本よしもとばななさんが描く、下町を舞台にした心温まる物語です。主人公のキヨカは「気」が見える特殊な力を持つ中学生で、その力を使って、近所ともの「友おじさん」が営む自習室の空間を清めるアルバイトをしています。日々訪れる人々の気配や感情を敏感に感じ取りながら彼女は下町の人間模様をみつめていきます。

物語の魅力は、温かな人情と厳しい現実が同時に描かれているところにあります。キヨカのお母さんは離婚し、お父さんは自殺未遂を経験します。普通なら話しづらい

こうした出来事が淡々と、誠実に描かれることで読む人は自然と物語の中へ引き込まれます。

キヨカは特別な力を持つ一方で、家庭や人間関係に悩み、揺れ動く思春期の少女でもあり自分と同世代の女の子です。その姿は能力というフィルターを通して成長する物語として胸に響きます。また、友おじさんという存在が物語に大きな安心感を与えています。彼はキヨカ的能力を特別なことだと思わずに絶妙な距離感で寄り添う大人です。家族とは違うけれど家族以上に心を許す存在がいること、それは現代社会においても稀で、そしてとても大切なことだと感じました。さらに誰もが顔見知りまれで小さな変化や噂が瞬くまに広がる環境は息苦しさとともに安心感も与えてくれます。

読んでいて印象的だったのは「特別な力」が物語の中心ではあるけれど、それが決して万能ではなく、微妙な人間関係や現実の困難の前ではむしろ無力に感じられる瞬間があることです。その時に支えとなるのは相手のことをまるごと肯定してくれる人や、そっと見守ってくれる場所なのだと気づかされます。

作者の吉本ばななさんは、この当たり前のようで忘れがちな日常を優しく、力強く伝えてくれています。

「ぼたんどうろう」というエピソードを紹介します。最初は題名の意味がよく分からなかったけれど、読んでいくうちにぼんやり揺れる灯のような人の気持ちや思い出が残っていることを表しているのかなと思いました。キヨカが出会った少女「ともみ」は、すでに亡くな

っていたけれど、自習室でも仲良く過ごせるようになり
ました。ある時、ともみからお願ひ事をされました。そ
の内容は、「私のパパとママに、ありがとうと愛してる
を伝えて。これからの長い、子どもがいない生活が、穏
やかで幸せでありますように。あと、私のスピーカーを
彼にあげてって。彼にも、幸せになってほしい。最初は
彼が他の人とつきあって、私にしてくれたようにプレゼ
ントを選んだり、他の女の人の親と仲良くするなんて考
えただけで発狂しそうだった。でも、今は違うの。今み
たいに淋しい顔で、思い出の場所にひとりでいてほしく
ないなと思う。」そうつぶやいて、彼女はふわっと消
えてしまいました。この思いをキヨカはともみの両親へ
伝えに行きました。両親は驚いていたけれど、涙を流し

て感謝の言葉をキヨカにたくさん話していました。

キヨカは人には見えないものを感じ取れるけれど、そ
れを怖がらずに受け止めているところがすごいと思
いました。私だったら不安になってしまうのに、キヨカ
はまっすぐに人の心に向き合っていて尊敬したし、この
場面が優しく、温かくて心に残りました。

エピソードを読んで、これまでのお話が静かにまとめ
られているように感じました。

大きな事件や大きな出来事があるわけではないけれ
ど、キヨカが自分の力や周りの人とのつながりを受け入
れて前を向こうとしている姿が印象に残りました。特に、
日常の中に小さな希望や安心があることを教えてくれ
るようで、自分の生活の中でも大事にしたいと思いまし

た。読み終わった後に心がホッと温くなるエピソードでした。

りの人をもっと大切にしたいなと思いました。

『下町サイキック』を読んで、最初は「サイキック」

読んだ本「下町サイキック」

という言葉から怖い話なのかなと思ったけれど、実際はとても温かい物語でした。キヨカは特別な力をもっているけれど、その力は人を遠ざけるものではなく、人の気持ちやつながりを深く感じられる大切なものだと感じました。友おじさんとの関係は、家族のようで友達のようなでもあり、読んでいてとても安心しました。下町の人々もそれぞれに悩みや弱さを抱えているけど支え合いながら生きている姿がいいなと心に残りました。この本を通して見えないものを信じる気持ちや、日常の小さな幸せを大切にすることの大事さを学びました。私も周

入 選

個性ある自分

榎原中学校 二年 山本 琉央

僕は、夏休みに入る前から珠川たまがわこおりさんの、『檸檬れもん先生』という本を読み始めました。最初にこの題名を見た時、果物の檸檬が先生とどう関係しているのだろうと考えました。この本を読み進めると、一人の少年と一人の少女の関係性を描いていたり、友達との関わり方を考えさせられたりする内容の話であるということが分かりました。物語の中心にいるのは檸檬先生と呼ばれる先生です。先生といっても、まだ中学三年生の少女です。彼女は、一見冷たくてとても落ち着いているように見えますが、一人の少年のために勉強や社会の厳しさなどを

しっかり教えてくれる優しい少女です。

僕が特に印象に残ったのは、檸檬先生が時折、少年に厳しい言葉をかける場面です。言葉だけを見ると冷たく感じますが、その後の先生の行動を見ると、あの言葉にも理由があったのだなと思うことができました。檸檬先生の、直接、正しい事を言うだけではなく、自分で考えさせて、見守るという考えがとても素敵だなと思いました。僕は、「相手に分かってほしい」や「助けてほしい」と思う感情を持った経験があったので先生はすごいなと思いました。実は小学校の時、問題の答えが分からず、「答えを知りたい。」「教えてほしい。」と思ったことがありました。しかし、「もう一回自分の力で解いてみなさい。」と言われ、その理由があまり理解できませんで

した。だけど、中学生になり、すぐ答えを教えてもらって、それは自分の力にならないということに気がつきました。それを踏まえて友達に勉強を教える時は、答えを教えるのではなく、それを解くためのヒントを教えるように心がけています。

もう一つ心に残った場面は、少年と檸檬先生との関わりを通して少しずつ変わっていく周囲との関係性です。少年は最初、「自分の事なんて信じてくれる人はいない」と思っていました。徐々にも変わっていき、自分を信用してくれる人は必ずいるのだということに気づき、明るく前向きになっていきました。人は誰でも、自分のことを信じてくれる存在がいるだけで、強くなれるということが分かりました。僕も、家族や先生、友達に

励まされた場面が何度もあったため、この感情はとても分かります。緊張している場面でも、誰かから応援されるだけで、不思議と自分に自信がきます。そのおかげで良い結果につながった経験から、少年と僕の体験が重なって感じることができました。

この本の終盤では、少年が二十歳、先生が二十五歳と成長し、久しぶりに再会しましたが、悲しい結末となっていました。この少年と先生は共感覚という音や数字が色に感じたり、人の名前を色でないと覚えられなかったりという個性を持っていたのです。しかし、そのせいで日常の中になじめず、いじめられていましたが、先生に出会って他人との接し方が変わり、いじめられることが無くなっていきました。

この『檸檬先生』という本を読んで身に付いたことは、人と人との関わり方には色々な形があるということだと思います。仲が良く側にいるだけの人や、何でもすぐに信じる。ことが友情や信頼ではないと思います。時には少し距離を置いて見守ったり、時には相手の力を信じてみる。ことが大切なのだと思いました。誰かと仲良くなるには、一定の距離感を大事にして、この本に描かれている、信じてみる。こと、待つことの大切さを学びました。この物語を読み終えてから、僕は友達が困っていた時はすぐに手を差し伸べるのではなく、まず声をかけることから始めようと思いました。友達を助けすぎると、その友達にとっても良いことはないし、自分のためにもならないので助けすぎないことも優しさなのではないかなと思います。

した。この本を読む前にも、少し考えたことはありましたが、ここまで深くは考えたことがなかったので、自分の考えを再確認できたので良かったです。

『檸檬先生』という本はただの小説ではなく、自分自身の考えや、行動を変えさせてくれるありがたい本でした。自分だけだと思っていた個性がもしかすると、身の周りの人にもいるかも知れないという安心感を持つことができました。これから先、僕は家族や先生、友達との関係の中で、この本から学んだ一定の距離が大事という。ことを胸の中に留めておきたいと思います。そして、自分も周りの人にとって、安心して頼れる存在になれるように成長していきたいと思います。

読んだ本「檸檬先生」

読書感想文の審査を終えて

昨今、読書離れやペーパーレスが進んでいます。「行間を読む」などというのは、死語になるのでしょうか。情報化社会において、何をどう選べばよいか、無数の選択肢から自分自身で考え、選択することは困難を極めるでしょう。また、1人1台のタブレットPC、生成AIの台頭など生徒たちを取り巻く環境は、想定を上回るスピードで変化しています。反面、日本の伝統文化は世界からも注目を浴び、日本食は世界遺産になりました。学校では伝統文化の継承、ふるさと学習の推進などが盛んに行われています。

今回の読書感想文を審査する中で、あらためて「読書のよさ」「日本語の表現の奥深さ」「感性を磨き続けることの価値」を感じることができました。

どの作品も作者の思いを「咀嚼」し、共感するだけでなく自分の考えと結びつけながら表現することができていました。どの場面をどう切り取り、どう表現するか、それこそ「個性」です。学年も学校も違う生徒たちの表現は「十人十色」でした。日南市内の生徒にはこんなにも素晴らしい「豊かな感性」と「表現力」があるのかと感じました。

「生成AI」に負けない表現力を垣間見ることもできました。人間の感性は、磨き続けられれば、その輝きを失われることはありません。

これからも日南市内の児童生徒の皆さんが、読書に励み、感性を磨き続けることを期待しています。そして、感じ取ったことを表現し、次年度もすばらしい応募作品が集まることを心より願っています。

日南市立榎原中学校 校長 日高幸浩

読書感想画入賞作品

【小学校一年生の部】



金賞 油津小学校 山根 智稀
読んだ本「ネズネズのおえかき」



銀賞 油津小学校 田中 想士
読んだ本「かいじゅうのすむしま」



銅賞 酒谷小学校 大嶋 声の花
読んだ本「おどってるこまってる」



入選 吾田東小学校 蛸原 啓斗
読んだ本「かめれおんせん」



入選 桜ヶ丘小学校 酒井 壱虎
読んだ本「ごきげんななめの
てんとうむし」

【小学校二年生の部】



金賞 桜ヶ丘小学校 忠地 虎太郎

読んだ本「かわいそうなぞう」



銀賞 吾田東小学校 鈴木 結慎

読んだ本「かいじゅうのすむしま」



銅賞 油津小学校 竹脇 葵風
読んだ本「かいじゅうのすむしま」



入選 吾田小学校 發田 怜央
読んだ本「おまえうまそうだな」



入選 南郷小学校 水野 琴葉
読んだ本「いっすんぼうし」



金賞 潟上小学校 谷口 結理
読んだ本「たんたのたんけん」



銀賞 桜ヶ丘小学校 島田 潤奈
読んだ本「火の鳥」



銅賞 東郷小学校 中村 暁太郎
読んだ本「雪窓」



入選 吾田小学校 河野 新
読んだ本
「かぶとむしとくわがたむしのひみつ」



入選 北郷小学校 河野 萌音
読んだ本
「オリンピックのおぼけずかん」



金賞 南郷小学校 上原 叶聖

読んだ本「小学館の図鑑NEO 魚」



銀賞 東郷小学校 竹中 風結

読んだ本「馬子と山んばばあ」



銅賞 大堂津小学校 岡澤 芽生

読んだ本「ぼくのがっこう」



入選 桜ヶ丘小学校 井上 大護

読んだ本「銀河鉄道の夜」



入選 吾田小学校 荒武 唯月

読んだ本「うまれてきてくれて
ありがとう」

【小学校五年生の部】



金賞

南郷小学校 城戸 妃羽

読んだ本「わたしの名前は

オクトーバー」



銀賞

桜ヶ丘小学校 長友 翼

読んだ本「白いりゅう黒いりゅう」



銅賞 吾田東小学校 矢上 空

読んだ本「羽毛恐竜 恐竜から鳥への進化」



入選 北郷小学校 川畑ひかり
読んだ本「ねむれないおうさま」



入選 飢肥小学校 小野 琴音
読んだ本「三分間ミステリー
悪魔のささやき」

【小学校六年生の部】



金賞

吾田小学校 板東 桃愛

読んだ本「ぼくのころがうたいです！」

銀賞

飢肥小学校 濱田 一華

読んだ本「マツチ売りの少女」



銅賞

油津小学校 魚見 市香
 読んだ本「かなたのi f」



入選 大窪小学校 杉田 悠馬
 読んだ本「わたしのあくび
 みなかった？」



入選 細田小学校 森 零月
 読んだ本「じいちゃんの山小屋」

読書感想画の審査を終えて

本を読んで、物語の中に入り込み、わくわくしたり、感動したりした気持ちを絵で表現するのが読書感想画です。皆さんの絵からは、物語への深い思いが伝わってきました。

どの作品にも、たくさんの工夫が見られました。今回は、金賞の作品について、特に素晴らしい点を紹介します。

一年生、山根智稀さんの作品。動物を画面いっぱい大きく描き、たくさんの色を使って塗り分けています。主役の人物や動物が、色の変化や大きさでとてもよく目立つように工夫されています。

二年生、忠地虎太郎さんの作品。画面の真ん中のゾウの表情が、本当にかわいそうで、気持ちが伝わってきます。背景の紫色がその気持ちをさらに強くしています。筆の運び方や色の重ね方も、とても上手です。

三年生、谷口結理さんの作品。顔の表情が大胆で、画面への配置が面白いです。特に手のひらの大きさの変化が、ひょうの子と主人公の生き生きとしたやりとりを感じさせます。

四年生、上原叶聖さんの作品。様々な海の生き物が生き生きと描かれています。画面からはみ出して描くことで、海の世界がどこまでも続くように感じられます。魚がとても詳しく描かれていて、魚への愛情が伝わってきました。

五年生、城戸妃羽さんの作品。少女の表情から、フクロウとの心のつながりの深さが伝わってきます。背景の落ち葉の色合いと、羽の模様の対比や、細かい筆で描かれた木が、美しい画面を作っています。

六年生、板東桃愛さんの作品。主人公が頭の中でイメージを広げる様子が、幻想的に美しく表現されています。人物の表情も構成も面白いですが、背景の色の選び方や塗り方の工夫が、絵に特別な雰囲気を作り出しています。

入賞した皆さん、おめでとうございます。そして、応募してくれた皆さんの作品にも、一つひとつ、素晴らしい工夫がありました。

絵の描き方や色塗りに「こうしなければいけない」という決まりはありません。あなたの感動が、絵を見た人に伝わるように、これからもいろいろな表現に挑戦してください。

細田中学校 校長 清 俊一

審査員氏名一覧

日高 幸浩 榎原中学校

伊鹿倉 洋樹 南郷小学校

小西 英夫 社会教育指導員

東 嘉太郎 社会教育指導員

米良 照彦 社会教育指導員

榎木田 文生 社会教育指導員

新改 和朗 学校教育課 指導主事

清 俊一 細田中学校

松浦 和枝 南郷小学校

栗山 大介 飢肥小学校

令和 7 年度

日南市読書感想文・読書感想画コンクール受賞作品集

第 17 集

令和 8 年 2 月発行

発行 日南市教育委員会 生涯学習課

日南市中央通 1 丁目 1 番地 1

編集 日南市教育委員会 生涯学習課図書館係

日南市飢肥 2 丁目 6 番 18 号

電話 (0987) 25-0158

